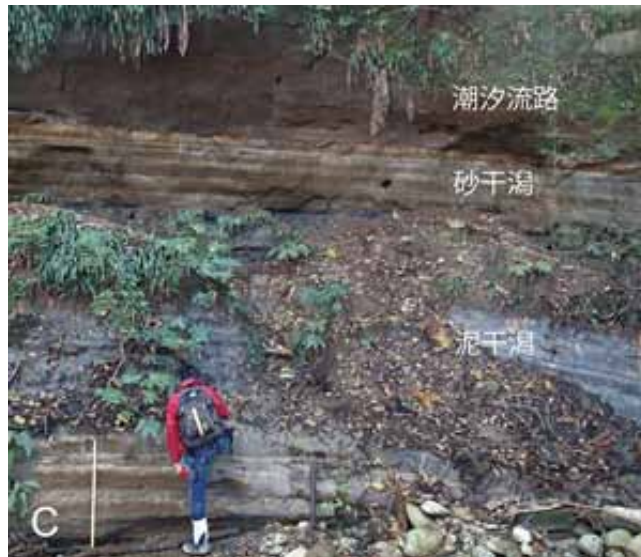
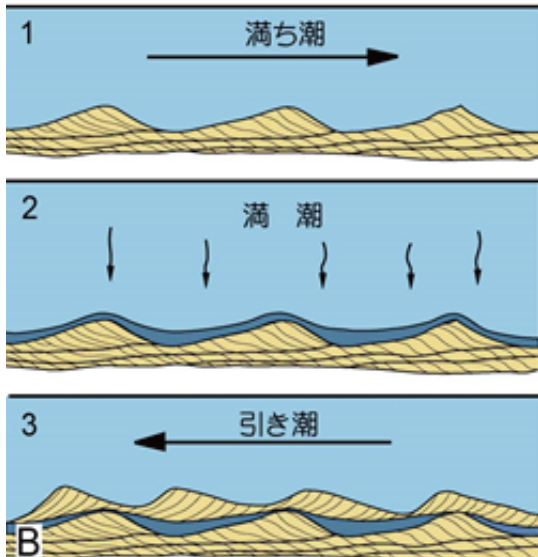


# 波の化石

柴 正博



Aは小鹿の小鹿の有度山総合公園の北の沢で見られる波の化石（フレーザー層理）。Bはそのでき方。  
CはAが見られる露頭の写真で、Aは厚い砂層（潮汐流路）の下の砂泥互層（砂干潟）で見られる。

静岡市駿河区小鹿の有度山総合公園の北の沢では、今から約13万年前に堆積した草雑層の露頭で「波の化石」(A)が見られます。「化石」とは過去の生物の生きていた証拠なので、「波の化石」とは正しくは過去の波の証拠になります。

このような波の化石は、干潟のような潮の満ち引きで生じる二方向の流れ（潮流）のある潮間帯で形成されます。干潟に満ち潮が侵入してくると、強い潮流によってたくさんの砂が海側から運ばれ、斜交層理をもつ波型の砂層（連痕：リップルマーク）が形成されます（B-1）。満潮から引き潮の間に干潟では一時的に水流が停滞し、そのときに海水中を浮遊していた泥質堆積物が沈殿して薄い泥層が

堆積します（B-2）。このような泥の薄層を、薄い布に例えてマッドドレープ（mud drape）といいます。

干潟で引き潮が始まると、潮流によって干潟の海底が侵食され、堆積したばかりのマッドドレープと波型の砂層の頂部も削られながら、その上に反対方向の斜交層理をもつ砂層が堆積します（B-3）。その結果、マッドドレープと斜交層理をもつ砂層がくり返すセット（潮東：handout）ができます。このような堆積構造をもつ砂の層理をフレーザー層理（Flaser bedding）といい、この「波の化石」は干潟でのかつての潮の満ち引きの証拠となります。